

教員を志望する大学生の環境意識・態度形成に及ぼす  
要因に関する一考察

A study on factors of environmental consciousness and attitude formation  
of college students aspiring to be teachers

古岡 俊之

FURUOKA Toshiyuki

武庫川女子大学 学校教育センター年報

第3号 2018年

【原著論文】

教員を志望する大学生の環境意識・態度形成に及ぼす要因に関する一考察

A study on factors of environmental consciousness and attitude formation  
of college students aspiring to be teachers

古岡俊之\*

FURUOKA, Toshiyuki\*

要旨

2017年3月、「主体的・対話的で深い学び」を謳った次期学習指導要領が告示された。教員志望の大学生たちは、この新学習指導要領の推進役を担うことになる。環境教育についても、環境意識を高め、生命を尊び、自然を大切に、環境の保全に寄与する態度を養うことが達成されるよう行わなければならない。一人一人の児童生徒が「持続可能な社会」、すなわち地球環境や自然環境の有限性を自覚しながら、将来の世代が必要とするものを損なわない社会の創り手となることが求められる。こうした観点から教員志望の大学生の受けてきた環境教育の成果を探り、大学での発展のさせ方を検討するための基礎的研究として、質問紙調査形式によって、大学生の環境に対する関心・態度、感受性、現在及び将来の生活行動、環境保全行動、体験と体験の場、経験と経験の場について調査した。

キーワード：次期学習指導要領 教員 大学生 環境意 持続可能な社会

1. はじめに

2017年3月、「主体的・対話的で深い学び」を謳った次期学習指導要領が告示された<sup>(1)</sup>。2006年の教育基本法の改正<sup>(2)</sup>、2007年の学校教育法の改正<sup>(3)</sup>に加えて、ここでも一層の環境教育の推進が学校・教師に課されており、教員を志望する大学生たちは、この新学習指導要領の推進役を担うことになる<sup>(4)</sup>。環境教育においては、環境問題に関わる学習によって得た知識をもとに、児童生徒の環境意識を高め、生命を尊び、自然を大切に、環境の保全に寄与する態度を養うことが目的として掲げられている。環境教育によって、一人一人の児童生徒に地球環境や自然環境の問題への関心をもたせ、将来の世代が必要とするものを損なうことなく、現代の世代の要求を満たすための社会の創り手となる行動に結びつけることがあげられる(文部省 1991, 1992)<sup>(5)</sup>。

しかしながら、これまでの環境問題についての意識と態度に関する調査では、環境問題への関心や知識があっても実際の行動には結びつかないという指摘がある。土井(2010)は、「学生の多くが、環境問題に対する関心があり、知識は豊かであるが、学生の『日常の環境意識・行動』と『環境問題解決に向けた意識・行動』にギャップがある。『環境意識・行動』の形成には学生一人ひとりの状況(背景となる経験、文化、興味・関心、等)が著しく関わる」と述べている<sup>(6)</sup>。佐藤ら(1999)は、大学生の環境意識調査では、「学生の意識における環境問題の関心事は、ローカルな公害問題よりもグローバルな環境問題の関心が強いといえる。環境保全に対する責任については、『国民』とする回答が多く、環境問題の解決には国民一人一人のかかわりが必要だという認識を持っている」ことを明らかにしている<sup>(7)</sup>。佐古ら(2007)は、大学生は環境問題をどうみているかの調査回答から「多くの大学生は、未知の環境問題が多数あることに驚く」と報告している<sup>(8)</sup>。

大学生に環境問題に対する関心や知識があっても実際の行動に結びつかないということは、環境教

\* 学校教育センター特任教授

育を進めていく上で大きな課題であると考え。

## 2. 研究の目的と方法

本稿では特に教員を志望する大学生の、環境に対する関心・態度、感受性、現在及び将来の生活行動、環境保全行動、体験と体験の場、経験と経験の場についての実態を分析し、教員を輩出する大学における環境教育の方向性について考察する。そのために、次の仮説を設定した。

仮説1：学生の「現在の環境意識・態度」と「将来の環境問題解決に向けた意識・行動」とは互いに影響しあう。

仮説2：取り扱う教材の環境課題の内容によって、態度形成に違いがある。

仮説の妥当性を検討するために、教員を目指す大学生を対象として質問紙調査を行った。

本稿では、この調査から教員を目指す大学生の環境問題についての意識と行動を分析する。その結果をもとに、大学における環境意識と態度の形成をふまえた環境教育のあるべき方向性を考察する。

## 3. 調査の概要

兵庫県内のA女子大学の「生徒指導・進路指導」「生徒指導・進路指導の研究」(2017年度夏期集中講義として開講)2・3・4年履修者及び教員採用試験受験特別講座4年受講者計130名に対して行い、有効回答数は129名であった。調査時期は平成29年8月21日(月)～9月6日(水)である。

### (1) 調査名

「教員をめざす大学生の環境に対する関心・態度・感受性及び体験・体験の場等の調査」

### (2) 調査の目的

- ① 大学生の地球や身の周りの環境、環境問題への関心や意識・行動、これまでの体験や体験の場、経験や経験の場について知る。
- ② 環境意識・態度形成に及ぼす要因を知る。

### (3) 調査の方法

選択肢による質問紙法(集団)とした。

### (4) 調査の手続き

講義の最後に質問紙を配布し終了後にその場で回収した。調査への協力は任意である。

## 4 質問紙の構成

### (1) 環境問題に対する関心

環境問題として、オゾン層破壊や熱帯林の破壊、地球温暖化など地球全体の環境問題が起きていること、また、酸性雨の森林破壊、河川や海洋汚染など身近で起きていること、野生の動物や昆虫の減少、エネルギーの使い方が問題となっていること、環境問題で苦しんでいる人がいること、生き物の連鎖、私たちのくらしとの関わりなどを質問

### (2) 環境意識(自然観、価値観、生活観)

生活と環境問題との関わりをめぐる生活観、価値観、大学生自身の自然観を質問

### (3) 現在の大学生の生活行動、環境保全行動

日常の暮らしや地域社会への参加行動、環境保全に配慮した行動の指標の内容を質問

### (4) 将来の大学生の生活行動、環境保全活動

将来の暮らしにおける、地域社会への参加行動、環境保全に配慮した行動の指標の内容を質問

## (5) 環境意識・態度形成の要因

自然や生き物を大切にしたり、地球や環境のためによいことをしたりしようとするようになったなど、大学生自身の環境意識・態度形成の要因について質問

## (6) 体験と体験の場

自然の中で遊んだこと、生き物や植物を育てたりしたこと、電気や水道を使わない生活をしたこと、清掃活動やリサイクル運動に参加したこと、川の汚れや空気の汚れなどを調べたことなどの体験の有無や体験の場面について質問

## (7) 経験と経験の場

自然の景色や生き物の命をはぐくむ営みへの感動経験、生き物の死に直面し悲しんだ経験、命の大切さや生命の仕組みのすばらしさへの感動体験、自然破壊や汚染について問題意識を持った経験、環境問題によって苦しんでいる人や動物のことを本気で考えた経験、資源やエネルギーの節約をしてよかったと感じた経験、清掃活動や資源回収運動に参加してみんなの役に立っていると感じた経験、自然や環境のために自分の生活の仕方を考え直さなければならぬと感じた経験の有無やその場面について質問。

## 5. 調査の結果と考察

### 5.1 環境問題に対する関心

#### ①結果（表1）

表1 大学生の環境問題に対する関心

質問項目	回答数 (%)				
	++	+	+-	-	--
地球的規模の環境問題 問1-1 オゾン層破壊や熱帯林の破壊、地球温暖化など地球全体の環境問題がおこっているということについて	13.9	53.5	24.8	7.8	0.0
問1-2 酸性雨による森林破壊や、汚れた水による河川や海の汚染など、環境問題が身近なところでもおこっていることについて	17.8	51.2	22.5	8.5	0.0
問1-3 自然の森林や沼地などがこわされ、野生の動物や昆虫などが減っていることについて	12.4	49.6	27.9	9.3	0.8
エネルギー問題 問1-4 石油や電気などのエネルギーの使い方が問題になっていることについて	10.9	51.2	28.6	9.3	0.0
環境問題と人 問1-5 世界の環境問題によって苦しんでいる人が多いことについて	26.3	59.7	10.9	2.3	0.8
問1-6 地球にはいろいろな生き物が、たがひにかかり合って生きているということについて	17.8	55.9	20.9	5.4	0.0
生き物 問1-7 環境問題が、私たちの暮らし方と深くかかわっているということについて	31.8	53.5	11.6	3.1	0.0

++:とても関心がある +:関心がある +-:どちらでもない -:あまり関心がない --:まったく関心がない

環境問題に対する関心については、「地球規模の環境問題（問1-1～問1-3）」への回答

オゾン層破壊や熱帯林の破壊、地球の温暖化など地球全体の環境問題についての問いに対して、関心があるが69人（53.5%）で最も割合が高く、どちらともいえない32人（24.8%）がそれに次いでいる。とても関心があると答えた者は18人（13.9%）であった。

酸性雨による森林破壊や、汚れた水による河川や海の汚染など、環境問題が身近なところでも起きていることについての関心を尋ねると、関心があるが66人（51.2%）で最も割合が高く、とても関心があると答えた者は23人（17.8%）であった。約7割の学生が関心を持っていることが分かつ

た。自然の森林や沼地などがこわされ、野生の動物や昆虫などが減っていることについての問いに対して、関心がある64人(49.6%)で最も割合が高かった。「環境問題と人・生き物」の視点になると、さらに関心が高まり、7割から8割の学生が関心を持っているという結果が出た。

## ②考察

以上の結果から、全般的に環境問題に対する関心があり意識も高いことが分かる。特に大学生の意識における環境問題の関心事は、身近な暮らしの中の環境問題よりもグローバルな環境問題の方の関心が強いと言える。先に記した土井、佐藤らの報告と同じ結果である。

自然が壊されていくことの影響については、意識が高い中でもやや低い傾向にある。継続して水鳥や湿原の保護、絶滅危惧種の保護に係る条約、世界環境会議特に京都会議の意義やパリ協定等の動向等を通して学習を充実させることの重要性を示している。

次に、原子力発電の危険性や石油エネルギーの枯渇、環境汚染の問題についての意識の高さが認められた。クリーンな発電として太陽光発電、ハイブリッドカーや電気自動車の開発等、世界の動向に注目していると考えられる。

環境問題と人との関係では、未だに続く紛争やテロ事件での環境破壊、地球の温暖化で南極の氷が溶け、小さな島国のいくつかが水没の危険に瀕しているなどの情報を通して学生たちは環境問題への興味や関心を広げていると考える。

## 5.2 環境意識（生活観、自然観、価値観）

### ①結果（表2）

次に、大学生の環境に対する生活観、価値観、自然観に視点を当てて質問をすると、傾向がはっきりと分かれる結果となった。それは、(問2-1～問2-4)と(問2-5～問2-7)についてである。前者は「気になる」と回答している割合が8割から9割あるのに対して、後者は気になるとしている割合が4割から5割と低くなっている。

内容を見ると前者は、環境の悪化から自身にもたらされる影響を危惧する受け身の立場からの回答であり、後者は、環境の悪化をもたらすかもしれない自らの行為について考える、言い換えると環境に働きかける側からの回答であった。

### ②考察

8割から9割の大学生にとって身近な暮らしの中での環境問題に関心が高いことが分かる。食べ物や飲み物の含有物について、農作物の成長過程に使われる肥料、農薬の有害性、無農薬栽培方法としての有機栽培などの情報が調査結果に影響しているものと考えられる。買い物では、廃棄するときのことを考えて購入するという認識が十分ではない。

以上のことから大学生の多くは、自らの行為が環境に対してそれほど大きな影響を及ぼしていると思っていないと考えられ、反対に他の人々の行為によって環境が悪化し、自分にとってよい影響を与えられていないのではないかと考えている。これらの回答をまとめると、大学生の環境問題に対する意識には偏りがあり、そのことが環境問題解決につながる意識、態度の形成に影響を与えている一因ではないかと推察できる。

表2 大学生の環境意識（生活観、価値観、自然観）

質問項目		回答数 (%)				
		++	+	+-	-	--
生活観	問 2-1	62.0	34.1	0.8	3.1	0.0
	問 2-2	41.9	53.4	4.7	0.0	0.0
	問 2-3	45.6	41.9	7.8	3.9	0.8
価値観	問 2-4	43.4	39.5	11.6	4.7	0.8
	問 2-5	13.9	48.1	24.8	10.9	2.3
自然観	問 2-6	12.4	36.4	35.7	13.9	1.6
	問 2-7	13.9	42.7	32.6	8.5	2.3

++:とても知る +:知る方である +-:どちらもない -:あまり知りたくない --:まったく知りたくない

### 5.3 現在の大学生の生活行動、環境保全行動

#### ①結果（表3）

ここでは、「現在の大学生の生活行動、環境保全行動」について質問している。つまり、環境問題解決に向けた具体的な活動の経験を尋ねた。どれも身近な環境問題に係る保全活動である。しかし、内容によって行動に大きな差がある。たとえば、(問3-1)については、7割以上の大学生が「おこなったことがない」としている。

また、(問3-5、問3-8)については6割から8割の者が、「おこなったことがある」としているのに対して、(問3-3)のように、幼いときから最も身近にあるものと思われるものについて、6割近い大学生が「おこなわない」としている。

#### ②考察

環境保全に関わる森林保護や植林に対する意識では、参加したことがない学生が多い。気持ちはあっても機会がないか、その重要性についての認識が十分ではないのであろう。森林教育の必要性を示していると考えられる。

生き物の世話の経験では、今までこのような活動をおこなったことがないとの回答が意外にも多いことに驚く。小学校の教育課程においては生活科や理科等での飼育・栽培活動、特別活動での当番活動や委員会活動などこの設問に係る体験的な学習活動が位置づけられている。にもかかわらず、動植物に対する思いが十分積み上がっているとは言い難い結果である。

リサイクルについては、9割以上の大学生たちが、これらの活動をおこなったり、おこなうように努力したりしていることが分かった。ただ、気が向いたときにおこなう学生が半数近くを占めているというのはどういうことだろうか。また、わずかだが今までおこなったことがないとの回答もある。これらの大学生に必要な学習体験を今後検討していくことが、新学習指導要領の示す環境教育の目的につながるのではないだろうか。

表3 現在の大学生の生活行動、環境保全行動

質問項目	回答数 (%)				
	++	+	+-	-	--
環境保全 行動 問 3-1	2.3	17.1	17.1	56.6	6.9
問 3-2	1.6	5.4	6.2	20.9	65.9
問 3-3	8.5	20.9	10.9	37.2	22.5
リサイクル行動 問 3-4	3.1	24.8	17.1	46.5	8.5
問 3-5	17.1	55.8	11.6	13.2	2.3
問 3-6	8.5	39.5	27.9	22.5	1.6
節約行動 問 3-7	33.3	47.3	12.4	7.0	0.0
問 3-8	13.9	56.6	23.3	6.2	0.0

++:どんな時でも気をつけておこなっている +:できる時もある気をつけておこなっている

+-:自分の都合の悪い時以外はおこなっている -:気が向く時におこなうことがある --:今までおこなったことがない

#### 5.4 将来の大学生の生活行動、環境保全行動

##### ①結果 (表4)

これまでの質問では、「現在の」大学生の意識や行動について尋ねてきたが、ここでは、「将来」の行動について質問している。特に、(表3)で示した質問と重なる項目があり、現在の行動と将来の行動を対比してみることができる。

環境保全活動への取り組みは、約5割が「おこなう」と考えている。また、身近でできる(問4-3～問4-5)の活動については、7割から8割の大学生が「おこなってほしい」と考えている。しかし、(問4-6)については、身近でできる行動であるにもかかわらず、3割以上の大学生が「おこなえない」と回答している。

##### ②考察

全般的に将来の行動についての意識は高い。しかし、自動車や電気器具などの便利なものにあまり頼らない生活をするということについては逆の傾向にある。この点は、現在の行動とほぼ一致している。つまり、現在、「電気の節約をして、エアコンなども使わないようにはできない」とする大学生の割合と、将来的に「自動車や電気器具などに頼らない生活をするのができない」大学生の割合がほぼ同じである。「今後の教育の方向として何を実践することが大切か」を考える必要性がここにある。

次に、自然や生き物を大切にしたり、地球や環境のためによいことをしようとしたりするようになったきっかけとして、地域や子ども会と連携した活動が6割近い。学校が地域や保護者とつながることの影響は大きいといえる。

第二次エネルギーのそれぞれの持つ長所・短所を踏まえて、節約行動につなぐための取り組みの必要性がみてとれる。

表4 将来の大学生の生活行動, 環境保全行動

質問項目	回答数 (%)				
	++	+	+ -	-	--
環境保全行動 問 4-1 自然や環境を守る運動に参加していくこと	21.7	26.4	45.7	5.4	0.8
問 4-2 環境問題で苦しんでいる人たちのために国際的に役立つ活動すること	18.6	27.1	33.3	12.2	0.8
問 4-3 地域の清掃や資源回収の活動に参加すること	30.2	41.9	20.9	7.0	0.0
節約行動 問 4-4 石油や電気などのエネルギーの節約、水や木材などの資源の節約をおこなうこと	29.5	43.4	23.3	3.8	0.0
生活行動 問 4-5 自分たちが出すゴミや排水の処理をきちんとおこなっていくこと	31.0	53.5	13.9	1.6	0.0
問 4-6 自動車や電気器具などの便利な物にあまりたよらない生活すること	13.9	16.3	36.4	28.7	4.7

++:進んでおこないたい +:おこなっていくと思う +-:どうなるかわからない -:あまりしないと思う --:できればたくない

### 5.5 環境意識・態度形成の要因

5. あなたは、小学生・中学生・高校生時代から、次のようなことによって、自然や生き物を大切にしたり、地球や環境のためによいことをしたりしようとするようになりましたか。1～5の当てはまるものに○をつけて下さい。

#### ①結果 (表5)

ここでは環境意識・態度形成の要因についての質問をしている。(問5-5)を除いてほぼ同じ傾向が出ており、約6割から7割の大学生が、学習や周囲の人々から影響を受けて、環境意識や態度形成が育まれていることが分かる。影響を受けなかったのは約1割である。ただ(問5-5)からは、地域の実態によっては全く異なる結果につながっており、約6割が地域からの影響を受け、約2割が影響を受けていないとしている。

表5 環境意識・態度形成の要因

質問項目	回答数 (%)				
	++	+	+ -	-	--
学習活動 問 5-1 学校の授業で自然や環境について学んだこと	20.2	57.3	15.5	6.2	0.8
問 5-2 学校の行事や児童会などの活動でおこなったこと	17.8	52.7	17.1	8.5	3.9
人の言動 問 5-3 先生が言っていることやおこなっていること	11.6	54.3	24.0	8.5	1.6
問 5-4 家の人が言っていることやおこなっていること	21.7	56.6	12.4	7.7	1.6
地域 問 5-5 地域の行事や子ども会などでおこなっていること	10.1	48.8	21.7	15.5	3.9
間接経験 問 5-6 テレビや新聞、雑誌などで見たり聞いたりしたこと	8.5	55.9	27.9	5.4	2.3
自然体験 問 5-7 自然の中で遊んだり生き物を観察したりすること	26.4	42.6	21.7	6.2	3.1

++:とてもよくあてはまる +:どちらかといえばあてはまる +-:どちらともいえない -:どちらかといえば関係ない --:まったく関係ない

## ②考察

大学生の日常の環境に関わる行動は、「環境教育」以外の学習や生活経験も影響し実現していると考えられる。今後、その要因についての調査・検討の必要がある。

また、大学生の環境問題に関する知識は、学校の授業での学びが多いという結果が出た。教員のもつ情報だけに頼るのではなく、教育課程に位置づけ、環境教育のねらいに即した指導が重要であることが読み取れる。

## 5.6 体験と体験の場

### ①結果（表6、表7、表8）

ここでは、環境に係る体験や体験の場について質問している。（問6-1、問6-2）にあるように、虫とりや草木遊び、また動植物を育てた体験についての質問では、7割以上の大学生が経験している。逆に、（問6-3）のように、8割以上が体験したことのない活動として、「電気や水道を使わない生活」が挙げられている。また、表7からは、「動植物を育てた場」として、「学校の授業時間や行事、活動の中で」や「家での生活や、家族との行動の中で」が4割ほどの大学生が体験していることが読み取れる。

表6 体験と体験の場

質問項目	回答数 (%)				
	++	+	+-	-	--
自然に親しむ行動 問6-1 虫とりや魚とり、草花を使ったあそびなど自然の中で遊んだこと	65.9	13.2	14.7	5.4	0.8
問6-2 自分で生き物を育てたり、植物を育てたりしたこと	50.3	24.0	17.1	7.0	1.6
問6-3 電気や水道などを使わない生活をしたこと	3.9	6.2	7.8	10.8	71.3
-----					
環境保全 問6-4 地域の清掃活動やリサイクル運動に参加したこと	20.9	26.4	30.2	14.0	8.5
-----					
調査活動 問6-5 雨の酸性度や川の汚れ、空気の汚れなどを調べたこと	42.6	34.1	18.7	2.3	2.3

++:かなり何度もしたことがある +:四~五回したことがある +-:二~三回したことがある -:一度したことがある --:まったくしたことがない

表7 自分で生き物を育てたり、植物を育てたりしたこと（複数回答）（N=129）

	質問事項	人数	%
ア	学校の授業時間や行事、活動の中で	53	41.1
イ	教育（保育）実習先の授業時間や行事、活動の中で	3	2.3
ウ	ボランティアやアルバイト先での行動の中で	0	0.0
エ	家での生活や、家族との行動の中で	51	39.5
オ	地域の行事や子ども会の活動で	2	1.6
カ	近所での遊びの中で	3	2.3
キ	学校の校庭などでの遊びの中で	3	2.3

質問の（問6-5）では、「雨の酸性度や川の汚れ、空気の汚れなどを調べた」体験について尋ねているが、7割以上の大学生が体験しており、それらの体験は（表8）から、多くは学校の授業で体験していることがわかる。

表8 雨の酸性度や川の汚れ、空気の汚れなどを調べたこと(複数回答)(N=129)

	質問事項	人数	%
ア	学校の授業時間や行事、活動の中で	61	47.3
イ	教育(保育)実習先の授業時間や行事、活動の中で	2	2.3
ウ	ボランティアやアルバイト先での行動の中で	1	0.8
エ	家での生活や、家族との行動の中で	1	0.8
オ	地域の行事や子ども会の活動で	2	1.6
カ	近所での遊びの中で	1	0.8
キ	学校の校庭などでの遊びの中で	1	0.8

## ②考察

電気や水道などを使わない生活をしたことのある学生は極めて少ない。筆者は22年前の阪神淡路大震災に遭遇した。教育委員会職員として避難者の方々の対応に追われたことがある。長期にわたる停電、断水で日常生活の混乱を目の当たりにした。調査に協力してくれた大学生はその後の生まれであるため、経験がないのも当然である。また、自然の中で遊んだり、自然との関わりを経験したりする大学生は多い。

しかし、その多くは学校で経験することが多いと回答しており、学校でおこなわれる環境教育の重要性がここでも示されている。

## 5.7 経験と経験の場

### ①結果(表9, 表10)

ここでは、環境教育により育った力について質問した。(問7-1)については、7割以上の大学生が、自身の育ちを感じている。しかしながら、それ以外の質問(問7-2~問7-8)では、1割から4割の大学生自身が育っていないと感じている。

### ②考察

具体的な自然との関わりを経験を自由記述してもらった回答の中に、学校の校歌を授業時間や行事、活動の中で繰り返し歌うことを3人(2.3%)があげていた。その数こそ少ないが校歌(歌詞)を歌うことで、命の大切さや生命の仕組みの素晴らしさに気づいたり、生活の仕方を考え直したりするきっかけとした学生がいることが明らかになった。形式的に流れがちな校歌の斉唱が、活用の仕方によって環境教育の教材として価値があることを示している。

表9 環境教育で育った力

質問項目	回答数 (%)				
	++	+	+-	-	--
自然に親しむ行動 問 7-1 自然の景色や生き物の美しさに、ひどく心を動かされたこと	44.2	31.0	17.1	6.9	0.8
問 7-2 生き物の死に直面してすごく悲しかったこと	45.7	16.3	10.0	14.0	14.0
問 7-3 命の大切さや生命の仕組みのすばらしさに感動したこと	35.7	23.3	29.4	10.8	0.8
環境保全 問 7-4 自然を破壊したりよごしたりしていることに驚いたこと	17.8	24.0	34.9	20.2	3.1
思考活動 問 7-5 環境問題によって苦しんでいる人や動物のことを本気で考えたこと	13.2	25.6	32.6	26.3	2.3
問 7-6 電気や水道などの資源・エネルギーの節約をしようと思ったこと	7.7	19.3	24.0	31.0	10.0
感受性 問 7-7 清掃活動や資源回収活動に参加してみんなが役に立っていると感じたこと	16.3	24.8	34.1	17.8	7.0
問 7-8 自然や環境のために自分の生活の仕方を考え直さなければならなかったと感じたこと	12.4	36.4	34.9	15.5	0.8

++:今ははまりとひいてる +:はまりでまが覚えている +-:そういうことがあったと思う -:あつたかどうかははまりしない --:そのようなことはまたくない

表10 経験と経験の場 (複数回答)

質問事項	人数 (人)								
	問題番号	7-1	7-2	7-3	7-4	7-5	7-6	7-7	7-8
ア 学校の授業時間や行事、活動の中で	特定せず	11	9	15	18	18	9	15	23
	① 小学校	8	8	18	7	7	5	9	11
	② 中学校	2	2	1	2	5	1	5	7
	③ 高校	0	0	4	5	7	0	2	4
	④ 大学	6	0	0	0	2	2	0	5
	⑤ 幼稚園	0	0	0	1	0	0	0	0
イ 教育(保育) 実習先の授業時間や行等活動の中で	0	0	2	0	0	0	0	0	1
ウ ボランティアやアルバイト先での行動の中で	7	0	1	1	4	1	7	4	
エ 家での生活や、家族との行動の中で	19	25	17	0	7	23	1	8	
オ 地域の行事や子ども会の活動で	0	0	0	8	0	0	11	0	
カ 近所での遊びの中で	6	1	0	5	0	1	1	2	
キ 学校の校庭などでの遊びの中で	1	1	1	0	1	0	0	0	
ク 校歌(歌詞)を授業時間や行事等で繰り返し歌うこと	0	0	2	0	0	0	0	1	

## 6. 仮説の検証

本稿では、「現在の環境意識・態度」と「将来の環境問題解決に向けた意識・行動」は互いに影響する(仮説1)、取り扱う環境課題によって態度形成に違いがある(仮説2)の二つの仮説のもとに考察を進めた。

教員を志す大学生の環境問題についての関心・態度・感受性及び体験・体験の場、経験・経験の場等に関する質問紙調査を実施し、大学生の環境教育についての意識と行動を「日常の環境意識・行動」

と「将来の環境問題解決に向けた意識・行動」の面から分析した。その結果、共通する特徴として、次のことが明らかになった。

それは大学以前の教育で、多くの大学生が何らかの環境教育を受けた経験を持つということである。1998年から1999年の学習指導要領改訂によって新たに小学校・中学校・高等学校に設けられた「総合的な学習の時間」をはじめとするさまざまな機会に環境教育にふれてきたからであると考えられる。

そこで受けた教育により環境意識が高められ、自然環境を守ろうとする態度形成まで大きな影響力となっているのだろう。それらの教育を受けてきた大学生の回答からは、環境問題への関心や知識、体験・経験が実際の行動に結びついていることを示している。

また、「現在の生活行動、環境保全活動」では「リサイクル行動」「環境保全行動」の意識は低い。しかし、大学生の特徴として「節約行動」への意識が高い。「現在の生活行動、環境保全活動」が低いと回答した学生の割合は、「将来の生活行動、環境保全活動」に関わろうとする大学生の割合も、現在のそれと同じくらいの割合に留まっている。現在の意識・行動と将来の意識・行動とは、ほぼ一致している。関心があっても実際には行動できないということだろうか。

そして、このことは学習材が身近な環境を取り上げたものよりも、グローバルな内容に重点が置かれた結果、意識・態度の形成に偏りが出ていることも推測される。

この二つの検証結果は、これからの環境教育を考えていく上で大事なことを示唆してくれている。

## おわりに

今回の質問から環境教育の問題の根底に、体験や経験の不足があると考えられる。その背景には、子ども期の自然体験の不足や、学校現場の忙しさが影響していると考えられる。学校は学習指導上や生徒指導上、多様かつ複雑な教育課題解決を迫られている昨今である。限られた授業時間の中で、学習内容の増加による本格的な体験を伴う教育の継続的な実施の困難さをあげることができるだろう。体験したことがらもつ意味は何なのか、環境問題の解決にどのように位置づけられるのか、といった意味づけの必要性が示されている。

今後の研究では、この結果及び今回の学習指導要領改訂の趣旨を踏まえ、学校教育のあり方や進め方等、日本の学校教育における環境教育に取り組んできたことの成果、抱えている問題点とその要因を究明していく必要がある<sup>(9)(10)</sup>。その1つの方法として環境教育においても態度・行動のプロセスに着目した学習教材の開発や評価の検討など新たな進展が望まれる。日本ではどの学校にも校歌があり、日常的に音楽の授業で、また入学式や卒業式など儀式、そして運動会、音楽会といった学校行事等様々な機会に高らかに歌唱されている。今回の調査で明らかになったように環境教育の推進にほとんど活用されていない。

これについては、先行調査においても指摘した課題であり(古岡 2005, 2017)<sup>(11)(12)</sup>、今後の環境教育学習材としての活用が期待される。

この調査により環境教育の実践を進める教員を養成する上での課題を検討することができたと考える。大学生に環境教育への取り組みを促すには、はじめは、環境や社会に関連のある情報に注意を向けることを通して、環境問題への関心を持たせることが取り組みやすい方法である。自然体験や社会体験を定期的に設定することも必要である。教員を志す大学生に何を体験・経験させるかは今後の検討課題としたい。

## 注・引用文献

- (1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編』文部科学省, 2017, pp.1-148, 文部科学省『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』文部科学省, 2017, pp.1-144  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1383986.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm)
- (2) 教育基本法 (平成 18 年 12 月 法律第 120 号)。第 2 条に「教育の目標」の中で環境教育の重要性に鑑み「生命を尊び, 自然を大切にし, 環境の保全に寄与する態度を養うこと。」(第二条第四号) と規定された。『2017 年版 ポケット教育小六法』晃洋書房, 2017, pp.18-19
- (3) 学校教育法 (平成 19 年 6 月 法律第 96 号)。改正教育基本法を受けて第 21 条に教育の目標として環境教育の重要性を踏まえて「学校内外における自然体験活動を促進し, 生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと。」(第二十一条第二号) が新たに規定された。『2017 年版 ポケット教育小六法』晃洋書房 2017, pp.18-19 p.41.
- (4) 藤岡達也「新学習指導要領と環境教育・自然災害・防災教育の観点から」『環境教育』日本環境教育学会, VOL.27 NO.1, 2017, pp.6-11.
- (5) 文部省『環境教育指導資料(中学校・高等学校編)』大蔵省印刷局, 1991, p.122 文部省『環境教育指導資料(小学校編)』大蔵省印刷局, 1992, p.119, 文部科学省『環境教育指導資料』国立教育政策研究所教育課程研究センター, 2007, p.108
- (6) 土井美枝子「環境問題についての意識と行動に関する比較研究 —広島大学・復旦大学・マラヤ大学の学生に対する質問紙調査をもとに—」『環境教育』日本環境教育学会, VOL.20 NO.2, 2010, pp.26-39.
- (7) 佐藤快信・西川芳昭・道山治延・佐藤敬一「大学生の環境意識調査—長崎ウエスエヤン短期大学のケース—」『地域総研所報』NO.7, 1999, pp.35-46.
- (8) 佐古順彦, ロバート・ギルフォード「大学生は環境問題をどうみているか: 環境評価インベントリ(EAI)への回答から Students' Understanding of Environmental Problems : Their Response to the Environmental Appraisal Inventory」『環境教育』, 日本環境教育学会, VOL.17 NO.1, 2007, pp.36-43.
- (9) 藤岡達也, 前掲論文.
- (10) 野田恵「次期学習指導要領と環境教育・食農教育の視点から—」『環境教育』日本環境教育学会, VOL.27 NO.1, 2017, pp.2-5.
- (11) 古岡俊之「西宮市立小学校校歌の中の山と川をめぐる環境教育の可能性—環境学習材の視点から—」『学校教育センター年報』武庫川女子大学学校教育センター, VOL.2, 2017, pp.45-59
- (12) 古岡俊之「西宮市立幼稚園歌の中の山と川について」『子育て総合センター研究紀要』VOL.5 NO.2, 西宮市立子育て総合センター, 2005, pp.1-7

## 参考文献

- ・文部省『環境教育指導資料 (中学校・高等学校編)』大蔵省印刷局, 1991, 文部省『環境教育指導資料 (小学校編)』大蔵省印刷局, 1992, 文部科学省『環境教育指導資料』, 国立教育政策研究所教育課程研究センター, 2007.
- ・国立研究開発法人国立環境研究所, 「環境意識に関する世論調査報告書」, 2016